



GRLNEWS

Gender Research Library
Nagoya University名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No.5

2020年1月発行

シンポジウム「科学とジェンダー」を開催しました

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）では、2019年9月27日（金）・11月12日（火）の2日間にわたり、三部構成のシンポジウム「科学とジェンダー」を開催しました。

9月27日の「第一部 科学の世界における女性研究者のあゆみ」では、GRLレクチャールームを会場に、女性研究者による科学分野への進出の歴史をたどりながら、何が壁となり、女性研究者はどのように道を切り拓いてきたのかを、国内外の登壇者が自らの体験をふまえて紹介しました。

講演では、当事者の努力だけでなく、良き男性指導者、メンターとの出会いがいに重要であることも語られました。

また、とにかく女性のみを対象とする女性研究者問題を、男性問題という視点から捉え、現在の男性のあり方を前提とした男女平等では不十分であり、男性にも変化が必要との指摘もなされました。

シンポジウム終了後も、講師と参加者、あるいは参加者同士の熱心な議論や意見交換が続いたことが印象的でした。

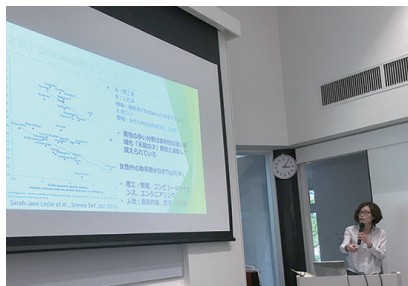
11月12日は、会場をアジア法交流館ACフォーラムに移し、「第二部 これから女性研究者が活躍するには」と「第三部 社会・大学と共に」を開催しました。

第二部では、次代を担う学部生、若手研究者が、それぞれに抱える課題を率直に語り、女性研究者が力を発揮するため

に必要なこと、女性教員の増加で見えてきた新たな課題を考えました。

従来こうしたシンポジウムへの登壇は珍しい学部生2名は、理系進学者が少ない女子校と、文理の選択がほぼ半々という男女共学校という、対照的な高校の卒業生でした。

身近なロールモデルとなる理系女性研究者との交流の場の設定、保護者向け説明会の開催、高大連携による研究紹介など、彼女たちが大学に求める具体的提案



は、新鮮かつ説得力をもつものでした。

「第三部 社会・大学と共に」では、男女共同参画担当理事高橋雅英氏による司会のもと、総長松尾清一氏、情報・システム研究機構長藤井良一氏、東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構教授横山広美氏をはじめ、とくに理系分野への女性の進出に尽力されてきた研究者の方々が、新しい時代にふさわしい優秀な人材の育成、獲得について語り、研究者の才能の目利き、マネジメント、ダイバーシティの推進など、大学の戦略の必要性が指摘されました。

最後に、本シンポジウムの企画者である國枝秀世氏が、企業におけるイノベーション実現に関わるデータを示し、社会にとっての女性研究者の重要性を強調し、シンポジウムを終えました。



張瑋容, 2020,『記号化される日本——台湾における哈日現象の系譜と現在』ゆまに書房

(ジェンダー・リサーチ・ライブラリ研究員)
張瑋容

「哈日現象」とは、1990年代に台湾で現れた日本のポップカルチャーの積極的な受容現象を指し、その受容者である「哈日族」の人々とともに、2000年代初頭までメディアと研究者の注目を集めていた。哈日現象は2010年代半ばから下火になり、代わりに若者世代の「哈韓」(韓流ブーム)が顕著になりつつあるが、台湾人が世代を問わず、日本の物事に特化して好意を抱くという親日的な傾向は依然として存在している。この親日的な傾向は一見して歴史的に継承されてきた結果と思われる一方で、世代間の差異と断続も見逃せないほど顕著である。この現状をどのように現代台湾社会、およびその歴史背景の下で理解すべきだろうか。

本書では、哈日現象を「記号化される日本への愛着」(以下、「<日本>への愛着」)として概念化した上で、台湾独自の対日関係の歴史的・社会的文脈に位置づけ、構造的な親日傾向との関係において、三部構成で分析を行った。第一部では、90年代以降の哈日現象の展開と「<日本>への愛着」の変容過程を新聞記事の考察を通して概観した上で、この現象を醸成した系譜を日台関係の歴

史に遡り、植民地期から現代までの各期における日本の記号化の構造的特質を、マクロな国家政策の次元とミクロな日常生活の次元の節合過程において分析した。

次いで、第二部は哈日現象の「現在」を空間軸と時間軸の考察である。まずは哈日現象の代表的地域である台北西門町と台北地下街での臨地調査に基づき、商品、広告、装飾など多様な形の「日本」で構成された哈日現象の風景を描き出し、日本文化商品市場とそこに集う業者・消費者の諸実践の特質を、商業的空間というメゾレベルにおいて多角的に解明した。その上で、さらに「哈日族」11名のライフストーリーと彼らが収集した日本のポップカルチャーの関連コレクションの詳細な分析を通じて、ミクロな生活実践のレベルから哈日現象の現在とその軌跡を浮き彫りにした。

第三部では、哈日族個々人の生活世界(ミクロ)と国家政策とイデオロギー(マクロ)を架橋する台湾の社会空間(メゾ)において、「重要な他者」として神話化される「日本なる集合的想像」の産出過程を析出し、日本植民地期・戒厳令期(戦後～1987)・ポスト戒厳令期(1987

～現在)の各期におけるマクロ(国家政策、外交)・メゾ(メディア、教育、市場)・ミクロ(個人の生活世界)の相互作用と節合の特質を「日本の記号化の系譜」モデルとして総合し、台湾における親日感情の遷移とその背景を成す社会的文脈の重層的構造を提示した。

台湾における哈日現象、または構造的な親日傾向に関する先行研究は一定程度の蓄積があるが、異なる世代の台湾人が日本の物事に対して抱く好意や親近感のような曖昧な感情が明確に捉えられていないものが多い。それら従来の研究に対して、哈日現象に表出している「<日本>への愛着」と構造的な親日傾向のつながりを「日本の記号化」で概念化して系譜学的に考察することは、従来の関連研究と一線を画する本書のオリジナリティと言える。



スタンフォード大学シービンガー教授の講演会

(公益財団法人東海ジェンダー研究所)
小川眞里子

東海ジェンダー研究所(以下TFGS)は、2020年度の企画の一つである国際講演会の講師として「科学とジェンダー」分野の第一人者であるスタンフォード大学のロンダ・シービンガー教授を8月に招きます。愛知芸術文化センター/アートスペースで行うTFGS主催の一般向け講演会のほか、名古屋大学でも学生・研究者向けにGendered Innovations(性差研究に基づく技術革新:性差技術革新)とダイバーシティに関する講演会が予定されています。

8月23日開催予定のTFGS主催の講演会は、近代科学の歴史をジェンダーの視点から再考しようというものです。彼女が「性差技術革新」という新分野を率いて登場するのは2009年以降のことです。それまでの彼女の仕事は18世紀を中心として「科学とジェンダー」に焦点を定めた一流の歴史研究でした。歴史学で培った鋭いジェンダー分析力を、現代の科学、保健と医療、工学、環境分野などの諸問題に応用したのが「性差技術革新」です。

科学とジェンダーという分野がそれほど一般的ではなかった1989年に、彼女は*The Mind Has No Sex?* を出版して大きな衝撃を与えまし

た。近代科学は2つの意味で女性の敵だと言うのです。科学は、教育や研究の場から女性を排斥し続けてきた点で、および男女の平等を擁護するよりも男女の差異を強調してきた点で敵だと。そして、そのように女性を組織的に排除して形成されてきた科学という営為が、果たして価値中立でありうるのだろうかという大きな問いが投げかけられたのでした。

少し大げさな言い方かもしれませんが、科学の世界でコペルニクスが地球中心の世界観を打ち砕き、ダーウィンが人間中心の自然観を打ち砕いた倣い言うなら、シービンガーは男性中心の科学観に鉄槌を下したと言ってもよいでしょう。彼女はそうした問いを、さらに*Nature's Body* (1993), *Has Feminism Changed Science?* (1999), *Plants and Empire* (2005) といった優れた著作で問い続けました*。TFGS主催の講演会は、今日のダイバーシティや女性活躍推進問題の根源にさかのぼり、長い歴史的経緯から科学と女性の在り方を問い直そうとするものです。詳しくはTFGSのHPをご覧ください。

他方、GRLでは2019年秋に「科学とジェンダー」をテーマに、「科学の世界における女性研究者のあゆみ」「これから女



性研究者が活躍するには」「社会・大学と共に」の3部構成の企画を行いました。この内容は、『GRL Studies』第2号に掲載予定です。本年8月23日に続く名大での25日の講演会は、前年の流れの発展として、現在世界的な注目を浴びているシービンガー教授の「性差技術革新」に加えダイバーシティも含めた企画を進行中です。こちらの詳細はGRLのHPをご覧ください。

シービンガー教授の重厚にしかつかうユーモア溢れる歴史研究と最新の科学技術の弱点を鋭く突く2つのジェンダー講演会に多くの方のご参加をお待ちしています。

*これら4冊の著作の翻訳はいずれも工作舎から刊行されており、GRLも所蔵しています。

グー・ジュの「女権宣言」後のフランス

(人文学研究科教員)
新井美佐子

GRLのエントランス正面壁には、フランス「人権宣言」(青色字)と、オランプ・ドゥ・グー・ジュによる「女権宣言」(ピンク色字。その第10条はGRL1階の梁に彫り込まれている)が記されている。それらの説明はGRLのパフレットを御覧頂くとし、ここではその後のフランスについて、至極ざっくりではあるが書いてみたい。

大革命を経て、皇帝に即位したナポレオンの下、1804年に公布された「ナポレオン法典」では、その213条「夫は妻を保護する義務を負い、妻は夫に従う義務を負う」に象徴されるように、女性は男性に従属する存在として位置づけられた。それが「改善」されたのは20世紀になってから—例えば女性に参政権が認められたのは他の欧米諸国に遅れ、日本とほぼ同じ1944年、夫の許可なく妻が就業できるようになったの

は1965年—である。ショパンの恋人としても知られ、男性名、男装で活躍した作家ジョルジュ・サンド(1804-1876)は例外的な存在と言えよう。

その後、フランス社会に大きな変容をもたらした1968年の五月革命前後からジェンダー平等への道が一層開けていき、人工妊娠中絶や協議離婚の合法化、職業上の男女平等や議員選挙候補者の男女同数(パリテ)の法定化等々が実現した。但し、「自由、平等、友愛」を掲げる国にあっても、それらを得るためには「闘い」が必要であった。フランス革命が「成功」体験となっているのか、あるいは他か、浅学ゆえ筆者にはその理由、背景は分らないが、日本に比べフランスでは人々が政治により関心を寄せ、声を上げているように見受けられる。上記パリテ法も喧々

諤々があった/あるが、ジェンダー・ギャップ指数の順位(2019年15位)を押し上げている。

パリの観光名所ともなっているパンテオン(1790年竣工)は、フランスの偉人として認められた約80名が眠る霊廟であるが、自身の偉業によってそこに祀られている女性は、現時点でマリー・キュリー、シモーヌ・ヴェイユ、他の計4名に過ぎない。彼女たちはもちろん、古くはジャンヌ・ダルク、時代をぐっと下ってカミーユ・クロデル、ココ・シャネル、シモーヌ・ドゥ・ボヴァワール、マルグリット・デュラス、フランソワーズ・サガン、エディット・ピアフ…日本でも著名なフランス女性(女優やモデルを除いても)少なくないのではなからうか。いずれもなかなか刺激的?!な人物、人生である。

日本における性的マイノリティと個人から政治空間への移行

(人文学研究科博士後期課程)
フォタケ イワナ

身近に性的マイノリティの当事者がいる。職場でも、学校でも、図書館でも。その当たり前現実を知らない人々はまだ多くいる。不可視化された世界で普通に生きている性的マイノリティの人も多くありながら、不可視性に挑む人々も最近増えている。私の研究は、かれらの特徴と違いを分析することである。

まず、カミングアウトという概念から始めよう。

自分の性的指向・性自認等を表明することは「カミングアウト」と言えるが、そんなに簡単なものではない。相手により、目的により、伝え方により、カミングアウトするのは完全に違う経験になる。例えば、自分へ・周りの人への・社会へのカミングアウトの特徴を考えよう。自分に対するカミングアウトは、自己認知・自己実現過程のなかの一つである。周りの人にそれを伝えるのは、主にかれらとの関係性を深めるためである(無論、他人からの認知・受容という目的がある)。社会へのカミングアウトは、たとえばプライドイベントでよく目にする「私たちはここにいます」というスロー

ガンを通じて、集団的可視化メカニズムとして、性的マイノリティの存在、悩みやニーズを主張する。そうした社会的カミングアウトは、日常的な個人としてのカミングアウトと異なっている。

LGBTの話を書く時、主に「カミングアウト出来ない・したくない」人々は注目されている。周りの反応を怖れ、自分のことを受容できず、生きづらい日常の中で苦しんでいる人々の話は近年話題になっていた。しかし、社会的なカミングアウトは個人のそれより複雑である。自分たちの悩みより、悩むよう仕向けた社会を問うものである。社会へのカミングアウトは、「私」の話だけではなく、「私たち」の一員になることであり、個人から公共への移行の過程でもある。「私たち」と「見ているあなたたち」の間、個人的なことは政治的なことになってしまった。「私がこうです」という発言より、「なぜ、こうである人のことを知らない・気づいていない・受け入れないの」という問いかけが浮かび上がる。社会的なカミングアウトは、危険・リスク・恐怖感を持つ行動でありながら、

個人が得ることはほかのカミングアウトと違って、ずいぶん抽象的であるだろう。にもかかわらず、毎年数万人がそれをやる。私の研究では、主に彼らの経験を着目する。

私の研究は、社会的なカミングアウトする人々のモチベーションを問う。リスクがあることを避けたい人びとがいるのは当然である。ある意味、「できるなら、みんなするだろう」と思っている人が多い。そうした前提のなかで、カミングアウトできるけどしたくない人々もあり、しなくてもいいと思う人々も多くいる。結局、だれに・どこで・どのようにカミングアウトするかは個人的な選択である。なぜ、ある人はその選択をする・しないのか? 社会へのカミングアウトをした人々の話を聞き、個人的なことをどの過程で社会的・政治的なこととして意識をはじめ、行動したのかという研究を現在行っている。



お知らせ

2020年度 ジェンダー研究集会開催助成金について

名古屋大学GRLは、国内外のジェンダー問題に関する研究の普及、推進が期待できる集会に対し、開催費の一部（但し飲食費を除く）を助成します。

助成金額・件数 1件あたり20万円を上限とし、年間3件以内

申請条件 ジェンダー問題について研究する学内外の団体およびグループ。
※但し、申請者（開催責任者）は、学生・研究員・教職員等、名古屋大学構成員とする。

申請方法 詳細につきましては、名古屋大学GRLのホームページをご覧ください。

募集期間 2020年5月18日（月）～6月26日（金）

第21回 図書館総合展 「エルゼビア賞」受賞

2019年11月12日（火）～11月14日（木）
「第21回図書館総合展／アート・ミュージアム・アンヌアール2019」がパシフィコ横浜で開催されました。

期間中行われたポスターセッションにおいて、100点を超えるポスターのなかから、GRLのポスターはエルゼビア賞を受賞しました。



ロンダ・シービンガー教授 講演会について

2020年8月25日（火）名古屋大学東山キャンパス内の野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、スタンフォード大学のロンダ・シービンガー教授による講演会を開催する予定です。

詳細については、決まり次第、GRLのホームページ等でお知らせします。

ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール（grl@adm.nagoya-u.ac.jp）までお知らせ下さい。



お問い合わせ：grl@adm.nagoya-u.ac.jp

電話：052-789-5111（代表）

アクセス：〒464-8601 名古屋市中種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分